

浄泉寺護寺会報

URL <http://e-jousenji.com/>

発行者 浄泉寺護寺会会長 庄 司 寿 夫

もう一人の自分をもとめて

浄泉寺護寺会 会長 庄 司 寿 夫

浄泉寺の行事の一年間を振り返ってみますと、6月総会から始まり、8月盂蘭盆会、9月帰敬式受式者研修会、10月東北別院報恩講参詣、11月浄泉寺報恩講、1月修正会、2月涅槃会、3月春彼岸、4月同朋の会総会、5月春の集い、帰敬式等とさまざまな行事があり、それぞれ有意義に取り組んで来れたと思います。これも門徒の皆様のご理解とご支援のお蔭だと深く感謝申し上げます。

「お寺・護寺会・同朋の会は三角関係である」とご住職が常々話されています。三角形の頂点にお寺があって、底辺に護寺会と同朋の会があり、お寺を支え合ってお互いに機能するのではないかと思います。この三者でお寺の理念に向かって進むことを願っています。

ここに、過日の「春のつどい」の折、浄泉寺責任役員の赤間榮夫様のメッセージを紹介いたします。

「…私は子供の頃から祖父母に連れられ墓参りをしておりましたが、それに気付かずにおりました。しかし、浄泉寺役員として本山に参詣し、南無阿弥陀仏の教えに出合い、その縁に恵まれ、帰敬式を受け今日に至っております。…」

諸先輩の歩んだ姿を学ぶことも大切な事だと思います。

また、今年の春のつどいで帰敬式を受けた女性の方から「帰敬式（おかみそり）を受けて涙が流れてきました」と云う話をお聞きしました。

私も、平成21年6月に本山で帰敬式を受けてまいりました。ご住職は「法名は一般的に亡くなってからいただくものと思われています。しかし、法名は生前中にいただき、仏門に入るスタートであります」と言われています。このような言葉から、自分の髪に「おかみそり」をいただくことは、大変心に残るものがありました。私達の生き方を問う帰敬式だと思います。

終わりに、過日パレットおおさきで山田火砂子監督、原作三浦綾子、寺島しのぶ主演「母」、小林多喜二の母の物語の映画を見てきました。映画の場面の中で次のセリフが印象的でした。「闇を経験しないと、光が分からない。光を求めて一生懸命生きることが大切である」

また、仏の世界では「光を通して闇であった」と云う説もあり、前述のことと重なって考えられます。

東日本大震災から6年4ヶ月

住職 赤羽根 證 信



「忘れないでください」このメッセージを、私達真宗大谷派仙台教区は毎年「3・11心に刻むつどい」として公開事業を実施して来た。

今年は6月10日、福島県郡山市に沢山の人々がつどい、佛事法要と講演「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」と題してのお話があった。今回の『集い』のテーマである「No Rain No Rainbow」は「大丈夫」と促すハワイの諺だそう。講師は映画監督・作家の森達也師。そして地元の人々の未来へのつながりを強くする芸能を観賞し、会場全体で「花は咲く」を涙と共に歌い、拍手と笑顔と「ありがとう、また会いましょう」の合言葉で散会となった。

特に福島は、地震、津波、そして原発事故という三重の、まさに未曾有の災害に見舞われた。自然災害の恐怖はさることながら、人災である原発事故への底知れぬ不安は、人間の傲慢さが生んだ産物で私たちは次世代まで負の遺産を永い間背負わされることとなったのです。

よしあしの 文字をも知らぬ人はみな

まことのころなりけるを

善悪の字 しりがおは

おおそらごとのかたちなり

(正像末和讃)

今日の学歴社会や経済優先は私達に幸せをもたらすものだけでないことを知らされた事実思いをいたして、異文化や他を認め、あたたかくつつむ内なるまことこそ真の人間のあり様と気付かされたことである。

私達真宗門徒としてこれから果たさなければならないことは、宗祖親鸞聖人の生涯を学びの原点とし、あらたな念佛者と共に自信教人信（自ら信じ同朋とともに）心豊かな、潤いのある日暮しを実現することを目指し精進することこそ大切と思うのです。

浄泉寺では以前、本山参詣して、ご門徒の交流を果たすため、毎年のように実施して来ましたが、参加者が減少したこともあり中止しています。最近私は時間が許せば宗祖親鸞聖人誕生会音楽法要（毎年4月1日）と報恩講ご満座（毎年11月28日）に上山することを目標にしています。

今年の春の法要（本山）には孫娘の美乃が「是非行きたい」と、嬉しい希望に坊守と共に計画。彼女のお陰で家族全員が参詣出来ました。思わずのご縁が新しい出会いの場になればと考えています。これからもよろしく願いいたします。

合 掌

— 雑 感 —

副住職 赤羽根 聡

生まれた意義と生きる喜び

梅雨に入ったものの、清々しい風がふく、心地よい毎日である。

期せずして私の知るところではベビーラッシュとなっている。先頃、上野動物園でパンダの赤ちゃんが生まれたというニュースを目にした。人間の子どもの手ほどの大きさで、うぶ毛ながら白黒の区別がはっきりしてきた様子に、誰もが顔

をほころばせる。40数年ぶりのパンダブームの到来である。一方で、職場にある杉木に巣くっていたカラスのヒナがかえった。14年前、こうした緑のまぶしい季節に、はじめて子どもを授かったことを思い出した。

しかし、誕生したいのちがあるということは、同時にいのちをめぐる様々な問題が周囲で起こってくるのもまた事実だ。パンダブームがさらにエスカレートすれば、羨望の目が注がれる親子にとってはストレスになるだろうし、カラスのヒナがかえったとたん、カラスの親は子を必死に守るため、ときには近くを通る人々に危害を加えることもある。かくいう私の娘も中学生となり、いろいろな思いをめぐらしながら溜息を漏らしつつ、学校の授業や部活動に取り組んでいる。

人間だって動物だって、育まれるいのちに変わりはない。それゆえに生きること、「生」を育むことはこんなにも辛いものだろうかと思わされる。それでも生きることエネルギーを、心血を注がねばならないのである。

音楽法要



「音楽法要」とは、親鸞聖人700回御遠忌の折に、松下眞一氏によって作曲され、以来毎年本山「春の法要」の初日である4月1日に親鸞聖人御誕生会慶讃音楽法要として厳修されている。声明と西洋音楽を融合した卓抜なメロディーは、当時画

期的なものだったに違いない。

私は学生時代に合唱団に所属したものの、高校のときとはあまりにも違うジャンルとその環境に、しばしばカルチャーショックを受けていた。その最たるものが音楽法要である。2泊の研修で熟考した上での演奏である。通常の演奏会という趣とは異なり、音楽法要を通じて、堂内にいる御門徒の方々、合唱団、そして内陣出仕している御法中すべてが一体となり、親鸞聖人の誕生を縁とする空間に違和感を覚えていた。しかもスタッフの多くは合唱団のOB。当然のごとく気を遣わなければならない。自由闊達に学生時代を謳歌しようと考えていた私にとっては苦痛そのものだった。

私が再び、これに向き合うことになったのは昨年2月、法要に参加する5名の御門徒さんと共に、練習会を持つことになったのだ。歌をこよなく愛する参加者の方々と慣れないピアノを弾きながら、当時を思い出しながら練習をおこなった。その結果、参加者の方々からは感動と感謝の言葉が余すところなくつづられている（浄泉寺護寺会報第21号参照）。

その練習会に参加した私は今年4月1日、家族を供だてて真宗本廟の御影堂に座していた。同朋大学教授廣瀬惺（しずか）師の記念法話の後、いよいよ今年も音楽法要は始まった。当時スタッフだったOB諸氏は皆、白髪が多くなっていた。しかし音楽法要に向きあう姿勢や押し寄せる波のような「念仏による合唱」の迫力は不変のものであり、感銘を受けずにはいられなかった。

どういふことなのだろう。あれだけ毛嫌いしていた音楽法要、今では御影堂の外陣で歌いたいという思いが強い。

浄泉寺護寺会総会報告

平成29年6月25日午後1時、浄泉寺護寺会総会が開催されました。

出席者全員による真宗宗歌斉唱、正信偈唱和、俱会一處前での読経焼香の後、総会開会。庶務蘇武則行氏司会のもと、庄司寿夫会長あいさつ、住職あいさつに続き、文屋文夫氏が議長に選出され、事業報告等6議案を審議。すべて満場一致で可決承認されました。

平成29年度総会議案

平成28年度事業報告

平成28年度収支決算報告

平成28年度特別会計決算報告

(維持改善基金・上山研修基金)

監査報告 監事内田政明氏

平成29年度事業計画の承認

平成29年度収支予算の承認

総会終了後には懇親会が行われ会員相互の親睦をはかり、盛会裏に終了いたしました。平成29年諸事業が効果的に運用されます様会員皆様のご協力をお願いいたします。

帰敬式受式者研修会開催

既に帰敬式を受けられた方を対象に、昨年に引き続き研修会を実施します。お忙しいことと存じますが是非ご参加くださいます様ご案内申し上げます。

日時：9月4日(月) 午前10時より

場所：浄泉寺本堂

会費：2千円(昼食代含)

9時30分受付 10時開会・勤行

10時30分講義

12時 … 昼食休憩 …

13時講義・質疑

15時30分恩徳讃斉唱 閉会

16時懇談・懇親 18時解散

これからの行事等

8月 一斉清掃(墓地、境内地)、各自の墓地と本堂境内周辺の清掃

13～16日 万灯籠会

9月 帰敬式受式者研修会

10月 東北別院報恩講参詣及び研修

11月 おみがき・報恩講

30年1月 修正会(しゅしょうえ)

2月 涅槃会(ねはんえ)

仙台組声明講習会

護寺会役員一泊研修

万灯籠会開催

8月13日～16日午後6時30分から8時まで、万灯籠会(まんとうろうえ)が行われます。参道両側に灯籠を灯すお盆の恒例行事です。

幻想的な雰囲気の中での墓参りは、夜の風物詩ともなりました。是非、ご家族揃ってお出かけください。

灯籠記名のお申し込み(一基千円)は、地区役員か寺までご連絡ください。

あ

と

が

き

東京在住の方から連絡があり「身内だけでの告別式をしたい」という。方法など葬儀場と打ち合わせを、無事済ませた。最近のデータによると、都心部ではシェアの3分の2ほどになるといふ。東北のこの地でもそんな傾向が見られ、感じられているが、はたして…と疑問視している。

向う三軒両隣りの人間関係には、煩わしい一面もあるのだろうが、「遠くの親戚近くの他人、迷惑をかけないように」とは立派なことだが、迷惑はかかるもの。いや「迷惑はかけていいもの」になれば、お互いにもっと豊かに、もっと優しくなれるはず。狭いながらも「お互い様」でくらしましょうナ。

南無阿弥陀仏(住職)